

○山井委員 三十分間、質問をさせていただきたいと思います。

きょうの毎日新聞の朝刊、きょうの配付資料に入れさせていただきました。最後のページ、ごらんください。「記述式「廃止を」高校七割 共通テスト採点に不安 千百二十九校回答」。

萩生田大臣、もうこれは答えは出ているんじゃないんですか。大体、大学入試の改革というのは、政争の具にするものでもありませんし、高校生が反対、そして高校が大反対しているのを押し切るものでもないですよ。なぜなら、これは高校生の人生がかかっているんですから。

萩生田大臣、この大学の入試改革、国語の記述式も含めて、今回のこの大学入試改革の主人公は誰ですか。お答えください。

○萩生田国務大臣 将来を担う高校生の皆さんです。

○山井委員 そうですよ。

私たちは党派を超えて、とにかく高校生が幸せになってほしい、公平で公正な大学受験を受けて、そして、できるだけ多くの高校生が希望の大学に進んでほしい、それを、私たち党派を超えて願っているわけです。全ては高校生の幸せのためなんです。

にもかかわらず、これは七割の高校が採点に不安、今も城井さんから御質問がありましたけれども、もう細かくは言いません、もう言い尽くされていますから。何と高校の七割が採点に不安ということで、廃止してくれと言っているんですよ。再来年の一月スタートですから、あともう一年二カ月、あと一年一カ月です。

きょう傍聴に高校生も来られました。今、萩生田大臣から大学入試の主人公は高校生であるという答弁がありました。

それで、高校の七割が廃止をと言っております。萩生田大臣、これはもう賛否両論じゃないんです。高校生の大多数、私が聞いたある神奈川県の高校生は、二百人に自分が私的なアンケートをとった、高校生、神奈川で。そうしたら、百八十五人が国語、数学の記述式は反対だったと言っていましたよ。圧倒的多数です。もうこれは答えが出ているんじゃないかと思います。

それで、最初のページを見ていただけますか。十一月六日に、大学入学共通テスト、その中の記述式の中止も求めて、四万二千人の署名を集めて、高校生が文科省で記者会見をされました。四万二千人です。高校生がこういう署名を集めるなんていうことは、私は前代未聞ではないかと思います。

更に加えて、次の三ページ、一枚めくっていただいて、十一月十九日、ほんの三日前ですね、この高校二年生が中心となった大学入学共通テストから学生を守る会が、改めて文科省で記者会見をし、また、審議官の方に緊急声明として記述式の中止を求める、こういう申入れをされました。

きょう、これは事前に、この一ページ目、三ページ目、四ページ目、五ページ目、きのう早い時間にお渡ししましたので、お読みをいただいて、御感想、御意見をお聞かせ願いたいとお願ひしておりますので、萩生田大臣、この高校生の声に対する回答をお願いしたいと思います。

○萩生田国務大臣 この書類は、先生からもいただいたんですが、その前に、高校生から省の職員が受け取った後に、その写しを拝見させていただきました。一つ一つ論理立って、高校生たちが何を不安に思っているかということがしっかり書いてあると思っております、その不安にしっかり応えていかなきゃいけない、こんな思いでございます。

○山井委員 いや、不安に応えるって、不安ばかりじゃないですか。もうあと一年一カ月で本試験ですよ。大学入試には、二年前ルールというのがあります。大きな改革をする前には、二年前には決めてしまう。もう完全に時間切れじゃないですか。不安を払拭する段階はもう超えていますよ。

これは、きょう私が質問をするということで、ある都内の高校二年生から大臣宛てにということでメールをいただきましたので、これは非常に、先ほどおっしゃったように、萩生田大臣、この大学入試改革の主人公は高校生ですから、三分ぐらいかかりますが、ちょっとぜひお聞きをさせていただきたいと思います。

萩生田文部科学大臣へ。私は、都内の高校に通う高校二年生で、いわゆる共通テスト元年の世代です。僕たちの

思いをぜひ大臣に聞いていただきたく、お手紙を書かせていただきます。

月初めには、英語民間試験の導入延期が発表されました。なぜここまで決断がおくれたのかという思いはありますが、実施を踏みとどまってくださったことは、当事者として素直にうれしい限りです。しかしながら、共通テストの問題は終わっていないどころか、記述式の導入という最大の懸念点は一切解決の兆しがありません。記述式テストの問題点としては、これまでも多くの受験生や教育関係者から、1採点の質が担保されない、2自己採点が難しい、3むしろ思考力、表現力をはかれない内容になってしまうなどさまざまな点が指摘されており、極めて欠陥が多いことは文部科学省としても御存じだと思います。

これを受けて、大臣を始めとする関係者の方々は、受験生が安心して受けられるようなテスト作成に努める、改善を関係各所に要請していくなどおっしゃってこられました。しかし、果たしてそれはこの時期に言うてよい言葉なのでしょうか。もう受験は約一年後に迫っています。僕たちはそろそろ受験に集中して勉強し始める時期です。本来なら、準備は既に完璧です、何も問題はありませぬという回答が得られるべきではないでしょうか。この時期に改善ができていない時点で、もう時間切れです。少なくとも初年度の実施は不可能です。このような制度は完全廃止にすべきだと考えますが、せめて一度延期してじっくり改善策を練ってください。このままでは、僕たち受験生は、入試自体への不信感という前代未聞の感情の中、勉強しなくてははいけません。

大臣や関係者の方々が、私たち高校生や未来を担う子供のことを考えて、少しでも教育をよくしていこうとお考えなのは重々承知です。だからこそ、ぜひ勇気を持って記述式中止を決断していただきたい。この制度では、受験も教育も改善できません。ただただ失うものが多いだけです。受験生は、一点の差が合否に、そして人生にかかわってくるのだということを考えていただきたいのです。誰のために、何のためにこの記述式制度を導入しようとしているのでしょうか。曖昧で不透明で不公平な入試は、もはやそれは入試ではありません。

長くなりましたが、大臣をお願いします。これまでに指摘されている問題点を解決する明確かつ実現可能なビジョンを、今この場で示していただきたいのです。もし、それができないのであれば、これから改善する、これから検討していくという回答しか出ないのであれば、記述式の導入は今すぐ中止すべきではないでしょうか。もうデッドラインは過ぎています。受験にロスタイムはありません。難しい決断ではあると思います。しかし、全ての受験生のためにも、そしてこの国の未来のためにも、中止のたった二文字をぜひおっしゃっていただきたいと思っています。令和元年十一月吉日、高校生よりということであります。

これは、この一高校生じゃなくて全国の高校生が今不安に思い、願っておられることだと思います。今このお手紙を聞いて、大臣の見解をお聞きしたいと思います。

○萩生田国務大臣 私宛ての手紙が何で山井先生のところに行くのか、ちょっと不審はありますけれども、しかし内容は、高校生の皆さんが真剣に今の現状を憂い、また悩み、ある意味では悲鳴に近いものもあるんだと思います。

今まで、この問題は突然出てきたわけじゃなくて、今まで積み上げてきたいろいろな経緯があります。そういう中で、今日の前に迫った、改善点というものを先生方からも御指摘いただいて、私は、この委員会の中でも、別に意地で先延ばしをすとかそんなんじゃないで真摯に与野党の声を聞いて判断をしたい、こういう思いで議論に参加をずっとさせていただいていますし、答弁も誠意を持ってしているつもりでございます。

その中で、自己採点がきちんとできるのか、あるいは採点の質が保たれるのか、公平な採点がきちんとなされるのか、こういった点につきまして、センターを通じ、これは、前回、英語の場合は、協定という仕組みの中で、民間の企業の皆さんの既にでき上がったものを使わせていただくという、言うならば構造の中での約束でしたので、例えば入札行為ですとか契約行為とはちょっと異なる形で進んできました。

これは、相手の方がやれるということ为前提に、手を挙げて、応札をされて、そして、契約行為によって結ばれておりますから、その契約の中身についてきちんと一つ一つ確認する必要があると思います。

先ほど、城井先生にもお答えしましたけれども、契約ではこうなっているけれども、だからといってということも詰めさせていただいて、その実効性をきちんと高めることがしっかりできるのか、その確認はする責任が私にはあるんだろうというふうに思っておりますので、高校生の思いというものはしっかり受けとめさせていただいて、できる努力をしっかりと、努めさせていただきたいと思っています。

○山井委員 いや、全然受けとめていないじゃないですか。

高校生の思いは、もう時間切れだと言っているんですよ。せめて延期をしてくれと。一年一カ月後で、もうこれから受験に、本番の試験勉強に入っていくときに、これだけ採点の質が担保できない、採点がばらつく、誰が採点するかわからない、アルバイトの方々、専門家でもない。不安だと言っているわけですよ。

なぜ私に萩生田大臣宛てのメールが来たのかというのは、きょう私が質問するというので、萩生田大臣が直接会ってくださらないから、私のところにこのメールが来たわけですよ。

萩生田大臣、これは難しい話じゃないんです。高校も七割が廃止をとっているんです。高校生も大多数がやめてくれと言っているんです。萩生田大臣、口では高校生の思いをしっかりと受けとめていていると言っているけれども、全く受けとめていないですよ。

萩生田大臣、高校生に会って、この署名を四万人分も集めた、もちろん見解の相違はあるかもしれませんが、冒頭の私の質問に対して大学入試改革の主人公が高校生、受験生であるとおっしゃるのであれば、その主人公の方々のお話を一度何とか聞いていただけませんか。

○萩生田国務大臣 同様の要望を川内先生からいただいたこともありまして、私なりに高校生の皆さんのお話は直接聞いているつもりでございます。

きょうのお手紙の方が、もしアポを入れて何かそういう行き違いがあったとすれば申しわけないんですけども、私はちょっと現時点では承知をしておりますが。いずれにしても、どなたかの紹介の人に会えば、どなたかの紹介の人の意見も聞かなきゃいけないと思いますので、そこは広く皆さんの声を聞きながら判断をしたいと思っております。

○山井委員 いや、私は、今までから、肝炎、子供の貧困、派遣労働者の方々、障害者の方々、さまざまな方々の、当事者の声を、党派を超えて大臣に届ける仕事とかをしてきましたが、やはりこれは、別に自民党であれ我が党であれ、みんな、議員を通してお願いしているんですよ。

これは、議員を通さずに、そんな簡単に大臣に会ってもらえるんですか。いや、それだったらいいですよ、私たちは誰も紹介しませんけれども。直接だったら、大臣、高校生に会っていただける可能性はあるということではないですか。

○萩生田国務大臣 適宜判断をしていきたいと思えます。

○山井委員 萩生田大臣、本当に記述式のこと、高校生から、しっかりじっくり、不安や意見を聞かれたことはありますか、具体的にお答えください。いつごろ、どんな場所で、何人ぐらいの方々から、記述式のことについて高校生から意見を聞いて、その高校生の方々はどうな意見をおっしゃいましたか。ちょっと、つまびらかに、丁寧にお答えください。

○萩生田国務大臣 大臣就任直後から、この英語の試験と記述式について、高校生の皆さんから懸念の声というものも聞いてきました。

どこで、何人、いつ、どういう形でというのは、ここでつまびらかにお話しできませんけれども、さまざまな人たちの声を聞いてきました。

これから一切聞く耳を持たないということではありませんので、たまたま、こういう委員会の席で、山井先生の知り合いの人に会ってくれと言われて、私がいいますよと言えば、これは、山井先生だけではなくて、やはり川内先生のお断りした人にも会わなきゃならないと思いますから、そういう意味で私は申し上げているので、高校生の話を聞かないということを前提に話をしているわけではありません。

さまざまな環境の中で、適宜判断をしたいと思えます。

○山井委員 これは大事なことですよ。申しわけない、ごまかさないでください。

記述式に限って、いつ、何人ぐらいの高校生に、どれぐらいの時間、はっきり言って立ち話とかだめですよ、そんなのは。高校生の人生がかかっているんですから。

お聞きします。

文部科学省で高校生の方ときっちり会って話を聞かれたこと、ありますか。

○萩生田国務大臣 文科省省内でお会いしたことはありません。

○山井委員 では、ほかにどういう。これは大事なんですよ。やはり萩生田大臣と私たち、認識にかなりずれがあるんです。

高校生は、本当に困っておられますよ。毎月のように模擬試験を受けて、記述式の模擬試験を受けるけれども、自己採点と全然狂う。どう対策したらいいのかわからない。そして、自己採点できないと二次で足切りになっちゃう、どうしよう。みんな悩んでいるんですよ。

私は、その声を聞いたら萩生田大臣も、一回立ちどまろう、延期、中止しようということになると思います。だから、お聞きしたいんですよ。

文部省内では聞いたことがない。では、どこで、何人の高校生から、何分間ぐらい、記述式の問題についての意見を聞かれて、その高校生は何とおっしゃっていましたか。それぐらいは言ってください。

○萩生田国務大臣 さまざまな機会を通じて、直接、高校生、二年生の方もいらっしゃるし、もう自分は受験対象じゃないけれどもという方も含めてお話を聞く機会がございました。

皆さん総じて、制度上の不安のことをおっしゃっていたのは十分承知をしております。

○山井委員 制度上の不安のことを言っているわけでしょう。

私たち、今、記述式中止法案の審議を求めています。ぜひ、これ、審議やりましょうよ。与党がオーケーと言え、できるんですから。

そして、これは、私は白黒はっきりした方がいいと思いますよ。もし与党の方々がこの法案、つまり記述式がいいと言うんだったら、責任持って賛成されたらいいんじゃないですか。審議しましょうよ。自信があるんですよ。やはりそういうことをすべきだと思いますよ。

そういうこともせずに、高校生の多くが、不安で苦しいのでやめてくれというものを強行するというのは、私は問題があると思います。しっかりと、高校生の人生がかかった問題なわけですから、ぜひ、まだ国会もありますから、この委員会で中止法案の審議をしていただきたいと思います。

委員長、お願いいたします。

○橋委員長 後刻、理事会で協議します。

○山井委員 萩生田大臣、さまざま不安があるとおっしゃいますが、プレテスト、もうないんですよ。実際、自己採点も含めて、高校生に対してプレテストは今後、再度されるんですか。

○萩生田国務大臣 プレテストを高等学校の協力を得て大規模に実施するのは、時間的、物理的に困難であり、まずは、これまで実施した二回のプレテストで認識した課題の解決に注力したいと考えておりますが、現在実施中の大学入学共通テストの準備事業を通じて採点基準の改善を図りますが、それを利用した自己採点の改善効果を実際に何らかの方法で確認する必要があると思っております。大学入試センターと協議したいと考えております。

○山井委員 そんないいかげんな話じゃ、全く安心できるはずないじゃないですか。

これは、今さまざま不安や問題点がある。それが改善できたかどうかというのは、何月になったら確認できるんですか。いつになったら結論が出るんですか。現時点では不安で問題があるというふうに大臣も思っておられるわけでしょう。確認作業はいつ終わるんですか。年内ですか、来年春ですか。いつになったら、今の採点、自己採点、あるいは質のばらつき、採点体制、それが万全だという確認作業はいつ終わるんですか。

○萩生田国務大臣 自己採点と採点結果の不一致については、大学入試センターにおいて、正答の条件の意味や内容をわかりやすく整理して、今年度内に高等学校へ周知することとしております。

採点の質の確保のための体制や方策については、高校の協力を得て採点過程を検証し、一連のプロセスを改善するための準備事業を今月実施しているところであり、その結果も踏まえ、採点の質の向上に努めてまいります。

採点者を選抜するための学力試験、選抜された採点者への事前研修については、今後、採点事業者とセンターの協議により時期を決め、その上で、組織的、多層的に採点を行う体制を構築してまいります。

このような取組を始めとして、記述式問題の出題や採点方法についてさまざまな方策を検討し、順次速やかに実行してまいりたいと思っております。

○山井委員 今みたいなことをやったって、改善できたかどうかというのは確認できません。

実際、きょうの配付資料の八ページにもありますように、今までのプレテストでも、正答率が低い、自己採点とのずれが三割、そして採点ミスが〇・三%あって、五十万人規模にすると千人から千五百人の修正が出る計算、これは七ページですね、こういう問題点があるわけですよ。

ということは、萩生田大臣、これはぶっつけ本番でやるんですか、もう次、プレテストをしないということは。高校生は実験台ですか、モルモットですか。余りにもかわいそうじゃないですか。今おっしゃったようなことでは、全く、本当にうまくいくかなんて、高校生も国民も納得できるはずないじゃないですか。

今おっしゃいましたね、プレテストを大規模にやる時間がない。やらないと、大丈夫な試験かどうか確認できないじゃないですか。もう一回プレテストをやりましょうよ。そして、その確認が出るまでは、再来年の一月はもう無理ですよ。大臣、何を言っているんですか。時間がないから、プレテストをやる時間がないと。高校生のこれは人生がかかっているんですよ。

大臣、実験台にしないと就任の会見でもおっしゃいましたよね。高校生の人生が一点にかかっているんですよ。万が一、運悪く不合格になったときに、その高校生は一生、この記述式や国語でもしかしてひっかかったんじゃないか、採点ミスがあったんじゃないか、アルバイトで大丈夫だったのかな、そんな思いを持たせるのは、やはりこれはおかしいです。

大臣、やるのなら、プレテストをもう一回やる。プレテストができないんだったら、時間切れで、実験台でぶっつけ本番でやってしまう。高校生の人生、余りにも軽く見ているんじゃないですか。

大臣、プレテストをもう一回やるのか、やる時間がないんだったら実施を延期するのか、答弁ください。
○萩生田国務大臣 繰り返しになりますが、現在実施中の大学入学共通テストの準備事業を通じて採点基準の改善を図りますが、それを利用した自己採点の言うならば改善効果を実際に何らかの方法で確認しなかったら、意味がないと思います。大学入試センターと協議したいと考えております。

○山井委員 何度も言いますが、何らかの方法でいつか確認するとか、そんなことを国会で議論している時期じゃないんですよ。高校生は、今模擬試験も受けて、大学、準備に入っているんですよ。冒頭おっしゃったじゃないですか、大学入試改革の主人公は高校生だと。高校生にとっては、もうデッドラインは過ぎていると言っているんですよ。

大臣、今おっしゃった、何らかの方法で自己採点が改善できたかどうか確認する。じゃ、それは、確認作業はいつ終わるんですか。いつですか。お答えください。

○萩生田国務大臣 今月、この準備事業を行っております。その結果が出て、その採用の方法をしっかりと考えて、順次速やかに対応したいと思います。

○山井委員 今月中に結果が出るんですか。でも、それで本当に、採点の、自己採点のぶれがあるかどうか、それと、先ほど城井さんも質疑されていましてから繰り返し言いませんけれども、アルバイトはどんな方なのか、採点者がどんな方なのか、さっぱりわからないじゃないですか。全容がわからないじゃないですか。納得、安心できるはずないでしょう。

採点者の体制、自己採点のこと、ばらつき、どんな人が採点するか。万全かどうか、最終判断はいつされるんですか。お答えください。

○萩生田国務大臣 大学入試センターにおいては、採点事業者に対し、仕様書において、採点者及び採点監督者に必要な研修プログラムとして、正答の条件等を踏まえた採点作業に関する研修、システム操作に関する研修、内容面、形式面に係る正答の条件等に関する研修、採点の演習等を採点開始日までに完了することや守秘義務に関する事前研修も行うことを求めています。

採点者数の見込みにつきましては、仕様書において、適正な試験等によって質の高い採点者を確保し、期間内に正確な採点を行うことができる人員を必要人数確保すること、なお、必要人数についてはセンターと事前に協議することとしており、現時点で文部科学省として具体的な人数を想定しているものではありません。

○山井委員 無責任ですよ。人生を左右する採点を、誰がどこで何人やるか、どういう研修かも、さっぱり、一年前になってもわからない。余りにも無責任。

そして、先ほどベネッセに嚴重抗議するとおっしゃいましたけれども、文科省が嚴重抗議するような会社の関

連会社が採点するような大学入試、人生を左右する、高校生に受けさせるのは余りにも失礼じゃないですか。高校生の身になってください。

私たちは諦めませんよ。私たちは、はっきり言って、これは不可能だと思っています。無理ですよ。無理だけれども、何で必死になって言っているのかというと、英語みたいに、後になって後になって、土壇場になって延期されると、本当に高校生はまたまた苦しむんですよ。どうせ無理なんですよ、不可能なんですよ。記述式をこういう五十万人規模でやるなんてことは無理、どだい不可能ですよ。でも、これ以上遅くなるとますます高校生が苦しむ。だから今決断してくれと言っているわけです。

どうしても決断されないんだったら、それは、いつ選挙があるかわかりませんが、選挙の争点になりますよ、野党は反対ですから。政権交代してでも、これは中止しますよ。将来、理科とか歴史とかもすると言っているけれども、とんでもないですよ。

でも、こういう大学入試なんというのは選挙の争点とか政争の具にするべきものじゃないんですよ。

萩生田大臣、もうデッドラインです。今この時点、一年一カ月前に、これから検討する、改善すると言っている自体でアウトですよ。時間切れ、アウト。萩生田大臣、何とか、何とか、これは延期でもいいですよ。とにかく、今こんな、何にも中身が決まっていない、そういう状況で、再来年の一月からやるなんて無理ですよ。

年が明けたら予算委員会もありますよ。私たち、徹底的にやり続けますよ。なぜならば、高校生の未来を幸せにするというのは大人の責任じゃないですか。党派を超えた大人の責任。高校生が苦しんでいる、悩んでいる、困っている、叫び声を上げている。なのに知らぬ顔ですか、文部科学省は。萩生田大臣、ぜひとも決断していただきたい。

ほかの聞き方をします。

じゃ、今後、さまざまな改善作業をしていくわけですね。そうしたら、その改善作業の結果によっては、まだ、一〇〇%、記述式を再来年一月からやると確定、決定したわけではないと理解していいですね。いかがですか。

○萩生田国務大臣 山井先生、多分、所属の委員会じゃなくて、きょうおいでいただいて質疑していただいていると思うんです。私、この問題を政争の具にしたことなど一度もありませんし、与野党の先生方の御意見にしっかり耳を傾けて、そして、ある意味では野党の皆さんの厳しい声と同じ思いで、企業の皆さんとの契約内容の確認をしています。

ここは今まで積み上げてきた経緯もあります。また、先ほども申し上げたように、契約行為で、やれるという企業の方が総合評価で入札をし、そして、契約を結んだ大学入試センターとの関係もございます。

ですから、当然、今課題になっていること、これはいつまでかかるんだと。入試の直前までかかって大丈夫ですよというのは、これは無責任だと思います。もう、皆さんがある意味では不安に思っていることも十分承知をしておりますので、可及的速やかに課題を改善できる、そういう努力をきちんと確認してみたいと思います。

○山井委員 ちょっと私の質問に教えてください。

今から改善とか、さまざまな取組をされるんですよ。その結果によって、最終的に記述式をやるかやらないか決めるんであって、現時点においては、再来年の一月、一〇〇%記述式をやること確定しているわけではないという理解でいいですね。

○橋委員長 萩生田大臣、時間が終わっております。

○萩生田国務大臣 基本的には実施に向けて努力をさせていただきますけれども、さまざまいただいた課題については、改善に努力をしたいと思います。

○山井委員 ぜひ、即刻、中止をしていただきたいと思います。終わります。